

# 棚田に学ぶ子どもたち

## —地域にかかわり自ら学ぶ子どもの育成—

藤本 勇二

徳島県勝浦郡上勝町上勝小学校

Childrens Learning with "Tanada-Terraced Paddy Fields"

Yuji FUJIMOTO

Kamikatsu Primary School, Kamikatsu Town

### 1 はじめに

実践的な場面で既習の知識を総合的に結びつけ問題を主体的に解決する能力。自己の生き方について振り返り生活を更新していく自覚的な態度。こうした「生きる力」を育てるためには、「総合的な学習の時間」と教科・領域を相互に関連づけた全体的な教育課程を創造することが求められる。

地域は子どもたちの生活の場であり学びの現場である。地域での学びの意義は地域社会の一員として実感的・共感的に学ぶことができ、知恵としての学びと人間としての生き方を同時に身につけることができることにある。地域の自然や暮らしの姿を学ぶときに、それを見ていく窓のようなものが必要になる。棚田には、その役割が期待できる。棚田は米の生産現場としてだけでなく、ひとつの文化遺産として日本人の心の中に刻まれてきた。最近は国土保全の機能をもつ「緑のダム」として、また様々な生き物が棲息する複雑な生態系の場として、その自然環境にも関心が高まっている。「農」という根元的な活動を通じて暮らしに出会える場なのである。棚田の持つ豊かで大きな教育力は学校だけではその力を最大限に引き出せないであろう。地域とのつながりが自然に求められ、「もの」・「こと」・「ひと」の関係が豊かに結ばれていく。

上勝町には全国棚田百選に認定されている「檜原の棚田」をはじめたくさんの棚田が点在する。

しかし本校の子どもたちは、自分たちの地域や生活にかかわりの深い棚田の存在をあまり意識しておらず、話題に上ることもほとんどない。様々な機会を通して棚田を学習に取り上げることで、自然環境への関心や環境と人間のかかわりについての認識が高まると期待した。これは、「棚田」とかかわった4年生の1年間の学習の報告である。

### 2 指導計画

#### 2.1 単元構想図（履歴）全40時間

（表1）

#### 2.2 単元の目標

○進んで棚田にかかわる活動に取り組み、棚田の自然環境の大切さやそこにかかわる人に関心を持つとともに、地域の一員として生活や文化を継承しようとする。

（学習にかかわる関心・意欲・態度）

○棚田にかかわった先人の暮らしの知恵や技のすばらしさ、また棚田と地域の環境とのかかわりやその変化と過疎や高齢化の問題を知る。

（学習にかかわる知識・理解）

○棚田について地域の方に話を聞いたり他の地域と比較して調べたりしながら、集めた情報を整理したり、学んだことや棚田と地域についての考えを自分なりに表現できる。

（学習にかかわる技能・表現）

○棚田の持つ多面的な意味を理解し、自分たちの

平成12年度 「総合的な学習の時間」 履歴

上勝小学校第4学年

月	4月				5月				6月				7月				9月				10月				11月				12月				1月				2月				3月			時数																	
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3																						
総合学習																																					40																								
国語	作文「棚田を見学して②」 メモしよう「棚田の生き物マップ①」																ローマ字の学習④								劇の脚本を作る②								方言と共通語				9																								
社会	くらしと水 「棚田の水①」				県の地図を広げて 「上野紹介④」 「山地の田・平地の田①」				国土とさまざまな土地のくらし 「全国棚田百選①」								昔と今のまちづくり 「野尻用水①」 「お米の精米①」				あたたかい土地と寒い土地 「上野に棚田が多い秘密①」								7																																
算数	面積「棚田の面積を測る②」																																				2																								
理科	若葉の季節 「棚田の生き物①」 若葉の季節「畑を作る①」				NHKたった一つの地球 「棚田①」				流れる水の働き 「川と災害①」				若葉の季節「棚田の生き物マップ①」				バケツイネの観察① 秋の自然「棚田のヒガンバナ①」 バケツイネの収穫①				生き物の1年間 「棚田の生き物①」				水のため 「棚田の水①」				10																																
図工	「棚田の生き物マップ①」																																				1																								
道徳	ほたるの川①																																				1																								
学活																	白米と玄米①				よく噛もう②								3																																
同和	ひかり「ぼくたちの村」①																																				1																								
行事	神田茶体験③												学習発表会②								古代米集会①								6																																
関連	使い切りカメラで 上野紹介を呼びかける バケツでイネを育てる 探検日記スタート																																				棚田特派員始まる 棚田の生き物マップスタート												インターネット導入 学校の近くで棚田発見				上勝町の パンフレットを集める								

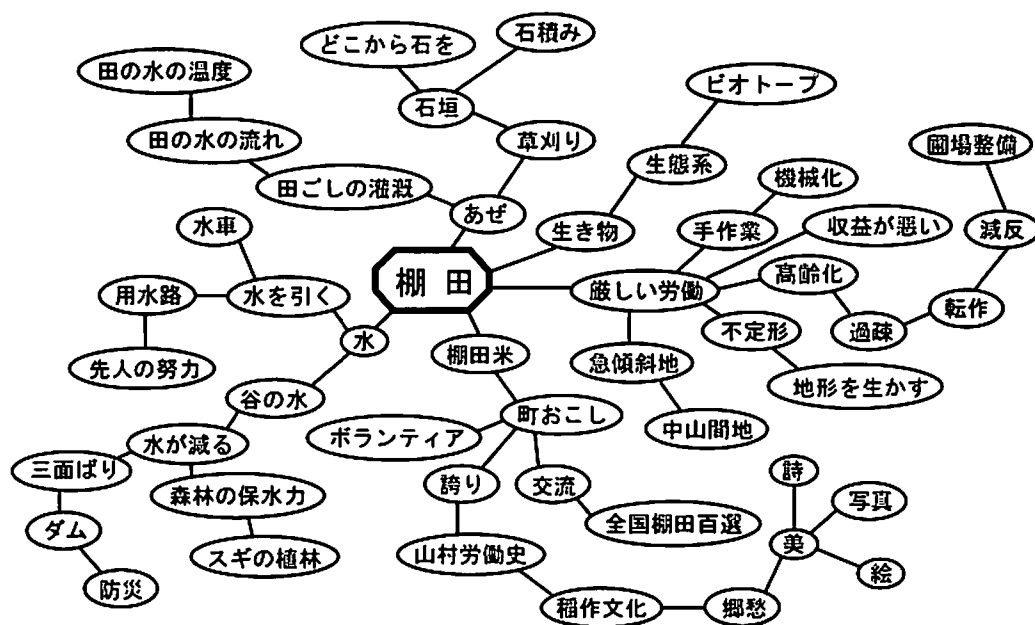


図1 棚田のマップ

暮らしと棚田とのかかわりの大切さについて考え、地域の持つ過疎や高齢化、棚田の荒廃の問題について考える。

(学習にかかわる思考・判断)

### 2.3 学習活動と評価規準表

(略)

### 2.4 教材の価値と子どもの学びや体験をつかむ

「ウェビングマップ (以下マップ)」を用いた手法で棚田の教材としての価値を吟味した。これは、子どもたちが興味・関心を持ったテーマとして取り上げる素材についてどのような学習内容 (教育的価値) があり、どんな活動 (課題づくり) が可能であるか、そのつながりや流れを予測したものである。ウェブ (web) とはクモの巣と言う意味でちょうどクモの巣状に図式化したものである (図1)。

棚田のマップ作成による検討から、生物や周囲の森、水など生態系について理科の学習として、また用水路や石積みなどを通じて米作りの工夫を

社会科の内容につなげていけることが分かった。さらに町おこしや全国棚田百選について取り上げることで他の地域との交流の視点も生まれてくること、さらに中山間地の農業現代の課題も見えてくることなど、米作りや上勝の生活に出会いながら、教科の内容と相互環流のある学習を進めることができると考えた。

次に、子どもたちにマップを書かせた。子どものマップには生き物の名前や「米」と言う言葉が多く登場する。しかし米作りの具体的な様子や取り上げた生き物の種類には個人差が大きかった。畦や石垣、用水路といった人の手の加わった点にかかわる内容はほとんど登場していなかった。人とのかかわりに目を向けさせるためには、実際に棚田で生活している方から話を聞く機会が必要となる。そこでゲストTに協力してもらい、社会科の単元で取り上げることにした。また、耕作放棄や転作、土砂崩れ、過疎と高齢化といった棚田の抱える問題についても全くあげられていない。そこで他の地域の棚田と比較させていくことで今日的な課題が4年生なりに明らかになってくる、自

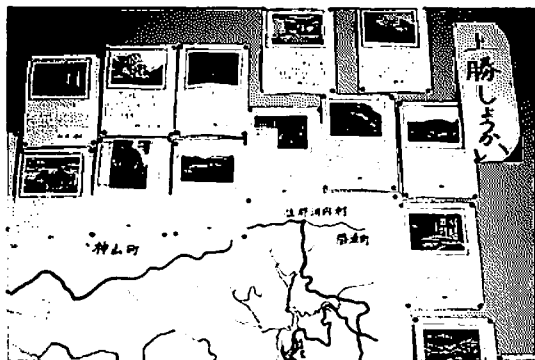


写真1 上勝紹介

分たちはどうしたらよいかに関心事になるのではないかと考えた。こうして理科・社会科と関連づけながら進める学習の全体的な見通しができた。

### 3 実践

#### 3.1 内の目から地域を見る

##### 1) 上勝紹介をしよう

地域の人からの聞き取りや田んぼでの体験を通じてそこに暮らす生活者や地域の一員としての視点を大切にしたい、と考えた。それを「内の目」と呼ぶことにした。そこで棚田と子どもたちの出会いを自分の関心のある地域の「もの」や「こと」をカメラで取材することから演出しようと考えた。子どもたちの中のだれかがきっと田んぼを撮影してくれるに違いない、それをクラスへ広げようと決めた。始業式の翌日に次のように切り出した。

「先生は、4月に上勝に来たばかりなので上勝のことは、よく知りません。みんなが上勝らしいと思う場所を写真に撮ってきて先生に紹介してください。」4年生23名を5つの班に分けて各班に使い切りカメラ(24枚撮り)を渡した。各自2枚ずつ撮影したら、自分の班の次の人に渡していく。放課後や休日を利用して、思い思いの場所を写真におさめてきた。子どもたちが取材してきた写真に「はくの家のとうふ」、「毎日見る福川トンネル」、「しいたけの仕事場」、「畑の近くにあるゆずの木」といったタイトルと説明の言葉をつけてA4大の紙に書く。これを上勝町全体の地図の上にはり付け、「上勝紹介」として教室の背面には

りだした。

子どもたちの関心の対象は川や山、自分とかかわりのある木(「畑にある大きな桜」といった自然や「自然の宿あさひ」のような遊び場であった。「製材所」(林業を映し出している)や「押し花」(彩り工房で押し花を作っている)のように地域の産業に結ぶつくものもあった。「水が少なくなった谷」(棚田の耕作放棄や天然林の伐採と山林の手入れ不足の一つの現れ)のように棚田学習につなげられる取材もあった。掲示された上勝紹介をもとに子どもたち同士でも話し合いができた。

棚田については、3人が田んぼを撮ってきていた。「絵のようなたんぼ」、「なかのおおっちゃんのとんぼ」、「椋原の棚田」であった。朝の会で写真を撮ってきた子にお米作りや田んぼの話をしてもらった。「これなあに?」、「棚田だよ」、「棚田って何?」、同じ上勝町の子どもでも棚田を知っている子も知らない子もいた。家でお米を作っている子、手伝ったことのある子、手伝ったことのない子にも田んぼへの関心の違いがあった。本校は昨年統合し、上勝町に1校だけの小学校になったので校区が広く子どもたちはお互いの地域をくわしく知らない。地域への関心とともにクラスの仲間への関心を高める活動ともなった。「棚田のことを案内をしてくれる人がいるから、田んぼを見に行こうか」と投げかけると行きたいという声が起こった。

##### 2) 棚田の見学に行こう

標高150メートルの谷間の学校からスクールバ



写真2 椋原の棚田見学

スに乗って、標高550メートルの山腹まで来た。見学に訪れた檜原の棚田は全国棚田百選（農林水産省認定）になっている棚田である。「棚田を考える会」の谷崎勝祥さんに案内されて田んぼに水を引いている谷を見に行った。狭い小径を用水路沿いに谷に向かいながら、「川の音はシャーシャーと気持ちよさそうだった。」「小さい田んぼがいっぱいあった。」「風が気持ちよかった。」「あぜにはいろいろな植物が生えていた。」「田んぼに引く水が冷たかった。」と棚田を全身で体感した。「田んぼにはタニシ、ヤゴ、ゲンゴロウ、トンボ、イモリ、オタマジャクシ、カエル、イトミミズがいました。」と日記に記しているように、子どもたちの一番の関心の対象は生き物であった。谷にいたアメゴに歓声を上げ、田んぼのタニシやヤゴ、イモリを教室に持って帰り、飼育した。

檜原の棚田見学では米作りの工夫や苦勞については谷崎さんから話があったにもかかわらず、ほとんど印象に残っていなかった。そこで社会科の時間に平地の田んぼの写真と比較しながら急傾斜地の田んぼの米作りについて考えさせた。そこから台風の被害の様子やおいしい米作りへのこだわりなど、聞いてみたいことが少しずつ明らかになってきた。谷崎さんに今度は学校に来ていただくことになった。谷崎さんからは動物の被害や水の話、「風が米を育てる」、「ゆっくり作るからおいしいお米ができる」、といった心に残る言葉で米を育てたいへんさや喜びを語っていただいた。子どもたちの感想文を紹介する。「谷崎さんは昔から棚田をしています。

……中略……動物がみんな悪いのでなくて逆に棚田にとっていい生き物もいると言ってくれました。石がきのスベアー石はくずれたときに使います。くずれないように工夫して大きいや小さいのを混ぜて土も入れたそうです。石がきがこんなにすごいなんて思いませんでした。」「昔は牛を引いて田んぼの土の中にある石を探していたそうです。……中略……棚田のお米はみんなのためにあるんだなあと思いました。もっともっと勉強して棚田のことを知りたいです。」

それから谷崎さんの話をもとに3～4人のグルー

プで1枚の新聞にまとめた。石垣に使われた長さ50cmほどの石を教室に持ち込み、一段一段石を積み上げ、水田を切り開いていった先人の姿について考えさせた。「初めて聞いたときにはスベアー石とか言われても意味が分からなかったけど、勉強しているうちに分かりました。初めて棚田を見たときと今と風景が変わりました。」「棚田は知恵と苦勞と努力でひきついでいるんだなあと思いました。棚田はすごく重い石をのせているんだなあと思いました。」の記述にも見られるように、用水路の堰や水田の幅よりも高い石積みなど知恵と技の意味を学ぶことができた。水を引く苦勞、水を守り田を守る努力など少しずつではあるが棚田のことを学習しながら、そこにある人のかかわりの深さが見えてきたようだ。

### 3) お米を育てよう

1学期には棚田学習と平行してバケツでお米を育てた。それは、棚田についての話し合いの中から「お米ってどうやって作るの?」という疑問が出てきたからである。教室のベランダで育ててきた桶をハサミで収穫し、ベランダの手すりを使って干した。それから、割り箸に挟んでしごきながら脱穀した。「千歯こき」「唐箕(とうみ)」といった昔の道具についての聞き取りする中で、昔の精米の話がでた。すり鉢にモミを入れてボールでこすってもみすりをしたり、一升瓶に入れて棒でつく方法で精米したときに、「いつも食べているお米と違うね。」「この小さい粉なに。」「ぬかっていうんだよ。」「ぬかってばあちゃんが栄養があるって言ってたよ。」「ぬか漬けもあるし。」と「ぬか」のことが話題に上った。

そこで、栄養士さんに玄米と白米の栄養的な違いなどについてTTで授業をしていただいた。その日の日記には次のような記述がある。「新田先生が来てくれて米の栄養の話をしてくれました。玄米から白米になるまでに栄養がぬかといっしょに落ちたんだなあ、ぬかは初めあまいけど後味がかすかすしてあまりおいしくありません。給食で強化米が入っているなんて知りませんでした。はいがという栄養のあるところが白米になる前になくなるなんて少し残念だなあ。」

また参観日に「よくかもう」というテーマで保健指導として玄米を取り上げた。玄米と白米を実際に炊いて保護者といっしょに食べ比べてもらった。バイキング給食でも玄米を使った料理が紹介された。このように他の先生方と協力しながらさまざまな場面でお米にかかわっていくことができた。

### 3.2 外の目から地域の棚田を見る

#### 1) 全国棚田百選に手紙を出そう

1学期の最後にポートフォリオを読み返しながら、これまでの学習を振り返らせてマップを書いた。これまで地域の人からの聞き取りや田んぼでの体験を通じて学びんできた子どもたちの地域への関心やこだわりがマップに表れていた。特に、生き物や米作りにかかわる具体的な言葉が多く登場し始めた。一方で、棚田の抱える問題に触れる言葉はまだまだ少なかった。全国の棚田とつながば、共通点と差違点に目を向け「外の目」から棚田をみることで、上勝の棚田を通して地域の課題が見えてくるのではないかと考えた。そこで「全国棚田百選のある全国の県に手紙を出してみよう」と投げかけることにした。

NHK教育放送の「たった一つの地球」で「棚田」を視聴した時のことである。この番組では新潟県安塚町の棚田が紹介されていたが、子どもたちは見学に行った檜原の棚田と生き物がちがうことや作られなくなった田んぼが土砂崩れを起こしていること（上勝町ではウノハナが咲いている）に気がついた。

2学期に入り、学校にインターネットが入ることになった。子どもたちはインターネットをやりたいと言いつ出した。そこで、「みんなが見学行った檜原の棚田は全国棚田百選の一つだと言うことは知っているね。他のところの棚田のこと知りたくないかな、棚田のある町や村に手紙を出そうか。」と持ちかけた。先ず全国棚田百選のある都府県から手紙を出したい場所を2カ所ずつ選んだ。競合した場合には話し合って決めた。次に住所を調べるようになった。ホームページを検索して住所を調べるのであるが、ローマ字が分からないために

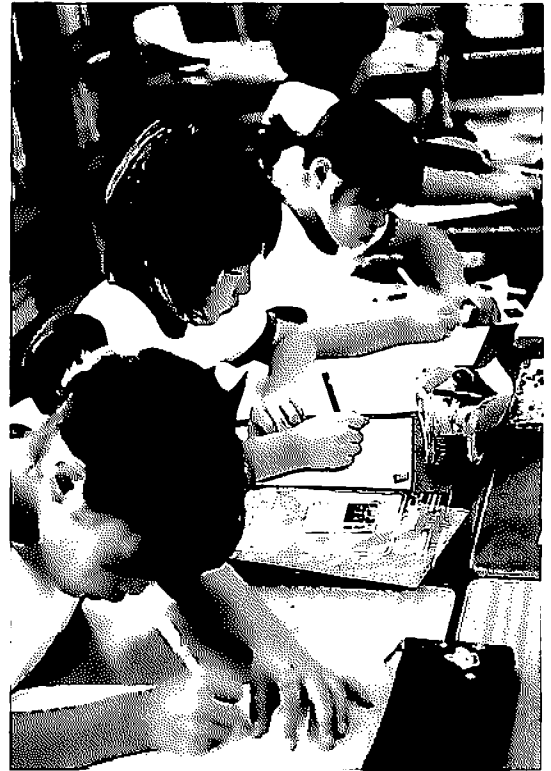


写真3 棚田百選のある自治体に手紙を書く

子どもたちは国語の時間にローマ字の学習をした。上勝のパンフレットとお願いの手紙を添えて一人で2カ所、多い子は5カ所に手紙を出すことになった。

はじめは返事が来るとは思っていなかったのであるが、一人また一人と返事が届くたびに子どもたちの目の色が変わり始めた。毎日の話題はどこから手紙が届くかになり、郵便配達の方を心待ちにするようになった。届いた返事には手紙と市町村の紹介パンフレットや棚田の写真が入っていた。どの手紙からも棚田への思いや保全にかける願いが伝わってきた。また過疎と高齢化、耕作放棄といった共通の問題を抱えていることが分かった。さらに上勝の棚田についてほめてもらえたり、学習をはげましてもらうことで、外の目から地域の棚田を評価することができた。子どもたちがお礼に出したメールには次のように書かれている。「パンフレットありがとうございました。……中

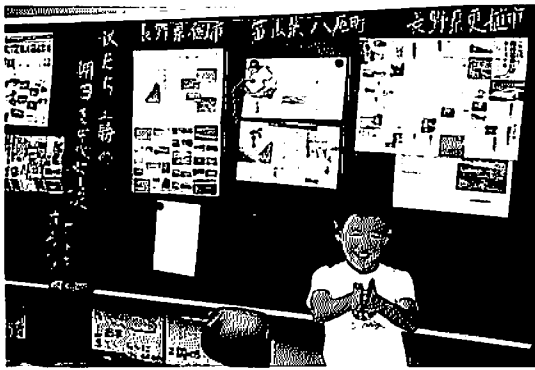


写真4 届いたパンフレット

略……上勝町では高齢者がふえ、棚田にうの花が咲いてきています。栗野町ではどうですか。虫や動物に田んぼをあらされているひがいはありますか。……」「梶原の棚田には上砂崩れはありますか。……中略……梶原の町の方も上勝と同じようにお年寄りが多くなっているんですね……」

## 2) パンフレット・棚田の劇を作ろう

全国の自治体に手紙を出そうという話し合ったときのことである。「上勝の棚田のことを紹介したい。」「上勝町のことが分かるもの手紙に入れたい。」「棚田のこと書いたものないかな。」「温泉にパンフレットがあったよ。」「役場に行けばもらえるかもしれないよ。」と子どもたちは放課後や休日に保護者の協力も得て、いろいろなパンフレットを集めてきた。ところが、棚田を紹介したものがあった。手紙を出すことと同時進行で自分たちで上勝の棚田を紹介するものを作ろうという話になった。上勝紹介で撮っている写真もある。棚田に近い子どもたちを棚田特派員として季節ごとに写真を撮ってもらってもいた。返事として各市町村から届き始めた手紙に添えられたパンフレットも自分たちの参考になる。

どんなパンフレットにするかコンクールを開いた。作ってみたいパンフレットの見本を一人1点の自治体の中から選び、その理由を添えて紹介する。全員が投票して自分たちの作るモデルが決まった。届いたパンフレットを参考にして写真を貼って紹介のコメントをつける。そうしてユニークな

パンフレットができあがった。小さなパンフレットが「プチパン」、さらに小さくて手帳ほどのものが「ミニパン」、折り返していくタイプの「ペラペラブック」、地図が入ったものを「ちーずパン」などと名付けて自分たちのパンフレットを作った。パンフレットを作ろうという活動は、予想外であった。棚田の持つ豊かな教育力がこうした活動を支えてきたと考える。棚田を通して子どもたちの可能性やしなやかな感性に触れた気がする。

11月に本校では学習発表会がある。「どんなことを発表しようか」と聞くとこれまでの棚田学習のことを劇にしたいと言い出した。全体を大きく4場面に分けて、学習した本人が登場するストーリーを示し、お世話になった地域の方を登場させるように話した。各グループごとに脚本を書かせたところ、ポートフォリオを取り出してこれまでの学習を振り返り始めた。この脚本作りがこれまでの棚田学習を外の日から見るよい機会となった。

## 4 結果と考察

### 4.1 子どもの学びの支援

#### 1) 学びの履歴と自己評価に生かすマップの効果

学んだことや認識の変化が学習前後のマップを比較することではっきりと見えてくる。単元目標に即した「棚田と地域の環境とのかかわり」や「人の暮らし」、「知恵や技のすばらしさ」に関する言葉がマップ上に項目として登場することから目標を達成できたかを評価することができる。さらに学習を通じての自らの体験を踏まえた具体的な名称が登場する点や直線的なつながりでなく、多岐にわたる複雑なつながりとして表現することができた点から認識の深まりを読みとることができる。

子どもたちに2枚のマップを比べさせてみると自己評価にも生かせる。「前に書いたマップと比べると、言葉が増えて詳しく書いている」「前は意味の分からないことを書いているけど今のはやったことや作り方を中心に書いているので少し賢くなった気がする」などマップの変化から学びの振り返ることが可能である。ポートフォリオや自己評価カードといっしょに用いることにより、

「上勝町には高れい者がふえて来ているとわかった」、棚田への気持ちや感じかたが「はじめは関心をもっていなかったけど今はすごく関心をもっている」など関心や意欲、思考・判断についても評価できる。

教師もマップにより教材の提示や具体的な支援が適切であったか、教科との連携は有効であったのか等、カリキュラムの評価と改善にも生かすことができる。最後のマップ作りの後の話し合いで「田んぼでお米を作ってみたい」という発言が多く見られた。4年生ではもっと体験をたくさん盛り込んだ学習にする方がよいと判断できた。棚田の豊かな教材性は明らかとなったので棚田の用水や石垣、米作りの工夫などを社会科の教材として丁寧に扱い、総合的な学習の時間とのつながりを豊かにしていくことで子どもたちに確かな学びを保障することができると予想した。このようにマップや学習履歴をもとにしたカリキュラムの評価・改善から翌年度の「きゅうきょくの桜もち」の実践は始まった。

## 2) 子どもの思いに沿った計画

マップにより子どもの学びを見取ることができたので、子どもの求めに沿って計画展開するための手だてを得ることができた。学習の全体的な見通しと教科との関連の中での適切な支援も可能となった。棚田の学習では導入場面での上勝紹介、2学期のスタートのインターネットの活用など子どもの思いから始めることができたので主体的な学習となったと考える。また社会科で「山地の田・平地の田」を取り上げたり、理科でテレビを視聴した。国語としての脚本作りは中間まとめの役割を果たした。このように教科との関連をはかりながら様々な学習活動を取り入れ組織的に行うことで子どもたちの学習を支援できた。

加えてポートフォリオの活用によって、評価活動を子どもたちに返すことで子どもの自ら学ぼうとする意欲を高めるものになったと考える。

## 4.2 棚田学習の効果

### 1) 教材性と多様な学習活動

棚田学習を通じて教材として棚田のよさが次の

ように明らかになった。

ア 地域を見ていく切り口としての棚田（棚田を通して、環境、くらし、農業、歴史、人のかかわりが見えてくる。）

イ 地域を知り、そのよさが分かり、地域にかかわっていかうとする（これから生きていく地域をどうするかについて考えることができる。）

ウ 棚田の持つ多面的な機能や側面を理解する過程でものの見方を深めていく（問題解決する力や総合的な認識力を育てる）

また多様な学習方法を学習活動の流れの中で自然な形で位置づけることが出来た。例えば自然体験（棚田での生き物採集や活動）、見学・調査（棚田見学・インターネット活用）、外部講師（棚田を考える会会長）、聞き取り（米作り）、表現活動（棚田新聞・生き物マップ・劇の脚本作り）などがあげられる。

### 2) 認識の変化と深まり

学校の周辺を自然観察に歩いていた時のことである。「先生、これって棚田じゃないの」と道路脇の小さな田んぼを指しながら子どもたちが言った。「そうだよね、石垣もちゃんと積んである」、「こんな近くに棚田があったんだ」と話す子もいた。典型として始めに檜原の棚田を見学に行ったが、学習を進める中で身近に目を向ければ棚田は見つかるということ子どもたちは気がついた。子どもが自らの課題について疑問を発する力がついてきたように思う。

また「棚田を守りたい」と題した子どもの作文には次のように書かれている。

「……（前略）……棚田はとても大切なものです。ほくも棚田を守っていきたいです。棚田を守るには、棚田のことをもっと勉強しているんなひみつを知りたいです。生き物のことやお米作りのことや石がきのことや山や谷のことをもっと知りたいです。ほくたちの町の棚田のことがじまんでできるようにがんばります。」

「棚田はすごい」と題した作文を書いた子は「ほくの家の近くにも棚田があります。いままでくわしく見たことはありませんでした。でも社会科でかしはらの棚田のことを勉強してから棚田の



ことが気になり出しました。……（後略）……」と記している。

お礼の手紙にも相手の地域が過疎と高齢化、耕作放棄といった上勝町と共通の問題を抱えていることに触れる記述があるなど、自分が観察した事実と知識をつなげて関連性を考えるような力も育ってきた。

また3月に「たんほのつうしんぼ」として棚田学習を振り返らせたときに棚田を通して「上勝町には高れい者がふえて来ているとわかった」、棚田への気持ちや感じかたが「はじめは関心をもっていなかったけど今はすごく関心をもっている」と記録している。さらに子どもたちがお互いのポートフォリオについて読んで感想を書いた付箋紙には、「棚田のことがよく分かってきたね。何か棚田の勉強ってちょっとほかの勉強とちがうよね。見学に行ったり、ゲストに来てもらったりしてとても楽しいよね。〇〇ちゃんはどう、5年生になっても担任が藤本先生になってもらってこれからも棚田の勉強したいよね。」と記されていた。

#### 4.3 今後の課題

この年の4年生の子どもたちは棚田との出会いから生き物と米作りへ関心を寄せ、全国の棚田へとつながり、パンフレット作りを通して地域へ目を向けていった。それは棚田の持つ豊かな教材性の力でもあり、その魅力の一つの側面である。棚田学習では、子ども自身が対象に働きかけて主体的に学んできたように思う。これまでの学習が次の課題を生み、新たな学習へとつながっていく。そうした連続した主体的な学習活動の中に子どもたちの「生きる力」は育まれていくのではないだろうか。

今後は生態系の視点や農業の抱える問題にも対応できるような棚田を中心にしたカリキュラムを作っていきたい。また個人の中でどのように見方や考え方が深まり、生き方の問題にかかわっていくことができたかを分析していくことも必要となる。棚田の持つ豊かな教育力を子どもたちの生きる力の育成につなげたい。